

盗人送りについて——ムラハチブと信仰伝承——

渋 沢 美由紀

盗人送りは、村落社会で盗みが発生し、犯人が見つからないときに実施される犯人摘発法の一つで、東日本に広く分布し、共同生活の維持を優先する呪術である。先行研究の多くは、ムラハチブなど、社会的制裁との関連からとらえており、事例の多くは「ムラに盗人が発生したら行う」臨時的なものであった。また、時期についても、これらの資料の検討から、近世中期ごろまでしか遡らないとする研究もある。だが、これまで主に扱われてきた臨時的な、ムラハチブと関連する資料以外にも、行事化され、周期的に行われた例も見られることがわかる。また、火事送り、疫病送りなど類似した構成を持つ習俗も見られる。その呪術性の強い内容からも、ムラハチブの一部というよりも、信仰伝承として考えるべきではないか。その根底にはケガレたものを送り出すという、同様の考え方があるようである。ところで盗人送りを考える上で、注目すべき資料がある。まずそのひとつは、田遊び、おこないなどの歌や語りの中に表現される盗人退去のことである。次に『玉葉』『江家次第』などの文献資料に見られる、「盗人糺事」の記述である。これらは、盗人送りの資料としてはこれまで扱われては来なかった。これらの資料を加えることによって、盗人送りの分布の問題、時期の問題を再検討してみることがあるように思われる。

徳本行者の民衆勸化についての一考察

——融通念仏的手法を中心に——

大久保 美玲

神戸市の浄土宗徳本寺において徳本の遺物として伝えられているものの中に、「百万遍念仏摺絵」というものが存在する。この摺絵は、一日十回ずつ唱えたことに、まわりのマルを塗りつぶし、全部塗りつぶし終わると、念仏百万遍唱えたことになるというものだ。これと類似の形式のものが、管見の中で、数点見付かっている。その代表として、善光寺大勧進版の「融通念仏勤修図幅」、もうひとつは浅草清水寺版「十界・念融通念仏図」を挙げる。どちらも善光寺にゆかりがあるものだ。

この事実を見るに、徳本は、善光寺の僧達が用いた勸化方法の影響を強く受けているということが窺える。善光寺は、古くから融通念仏の道場であった。つまり、「百万遍念仏摺絵」から、徳本と善光寺、すなわち徳本と融通念仏とは、深い関わりがあることがわかる。この他に、宗派を超えた勸化、講の結成を促し大勢の人々との念仏を奨励することなどからも徳本勸化と融通念仏との類似性が見てとれる。徳本は、日本仏教に深く根付いている融通念仏的勸化方法をとったことにより、幅広い人々の信仰を得ることができたことを指摘したい。逆にいうと、融通念仏は、日本の仏教文化に深い影響を与えているということを再認識しなければならないと思う。